

## シリーズ湾岸戦争30周年 ① 湾岸戦争におけるイラク側の視点

# NIDSコメンタリー

阿部 昌平 主任研究官  
第 182 号 2021 年 7 月 29 日

### はじめに

軍事作戦において、各種情報に基づき敵がどのような行動をとる可能性があるかを適切に見積もることは、作戦を成功に導くうえで最も重要な要素の一つである。指揮官は、作戦にあたって情報幕僚に対して、敵がどのように考え、行動するかを、敵の立場から論理的に分析することを求め、指揮官自身もその分析の妥当性を判断して、作戦を組み立てていくことになる。しかし過去の例から言えることは、多くの場合この見積りは自己の経験や考え方の投影となり易く、必ずしも敵の認識に基づいてはいないということである。この敵の認識を明らかにするため、アメリカでは過去に多くの努力が行われてきた。良く知られているのが第二次世界大戦後にアメリカ陸軍が実施したドイツ軍戦史プログラム (the German Military History Program) や、戦後に日本においてアメリカの戦略爆撃調査団が実施した、旧敵国軍人に対する尋問と押収した旧敵国の関連公文書の分析である。

湾岸戦争に関しては、2003年のアメリカ軍を主体とした多国籍軍によるイラク進攻作戦 (OIF: Operation Iraqi Freedom) が、敵であるイラクの認識を明らかにする契機となった。この作戦は、クウェートの解放という限定的な目標で戦われた湾岸戦争とは異なり、首都バグダッドを占領、イラクの独裁者サダム・フセインを権力の座から排除し、新たに民主的なイラクを建設するという目的で、イラク国内に対する全面的な進攻が行われた。その結果、湾岸戦争関連のものも含めた膨大な量のイラクの公文書などを手に入れるとともに、多くの捕虜を得ることが出来たのである。これらの情報源を新たに得たアメリカは、直後に「イラクの視点プロジェクト (Iraqi Perspective Project)」を立ち上げ、OIF、イラン・イラク戦争そして湾岸戦争における敵の視点を明らかにすることに取り掛かり、2006年にはその成果の一部として、OIFに関する文書が米軍の JFCOM (Joint Forces Command) から一般に公開された。その後、逐次成果が公開されたが、湾岸戦争に関するものは民間のシンクタンクである IDA (Institute for Defense Analysis) から発表された。

本稿では、上記のイラクの視点プロジェクトの概要と、本プロジェクトにおいて明らかにされた湾岸戦争における敵(イラク)の認識が、アメリカを中心とする多国籍軍の常識とどのように異なっていたのかを紹介し、歴史的、地理的な特性を踏まえて育まれたそれぞれの国特有の文化や物事の考え方を理解することが、安全保障に関する問題に対応する上でいかに重要であるかを提示したい。

### 1 イラクの視点プロジェクトとは

イラクの視点プロジェクトは、JFCOM 内で米軍の統合に関する教訓収集を主管とする JCOA (the Joint Center for Operational Analysis) が後援するプロジェクトであった。このプロジェクトの成果の一部として、一般に公開されているドキュメントの作成を行ったのは、IDA に組織された JAWP (the Joint Advanced

Warfigting Program) である。JAWP は、アメリカ国防総省の装備・技術・兵站担当国防次官、政策担当国防次官、統合参謀本部副議長及び JFCOM 司令官により後援されている事業である。関連ドキュメントの作成にあたっては、多くの軍人や研究者とともに、アメリカの歴史家として高名なウィリアムソン・マーレー博士が大きく貢献している<sup>1</sup>。

検討にあたって使用されたのは、イラクの一次史料として政府公文書、ビデオ・テープ、録音テープ、地図、写真などの物的な史料の他、当時のイラク政府高官に対する尋問記録である。尋問は、JFCOM が担任し、イラク政府のトップ 55 人の高官のうち 15 人に対して実施された。これらの高位の捕虜のために準備されたバクダッド空港にある特別収容施設、アブ・グレイブ捕虜収容所、そしてバクダッド周辺の隠れ家で尋問は行われ、懐柔のため豪華な昼食などが提供されたとされている。尋問された高官には、フセイン大統領の個人秘書、共和国防衛隊の軍団司令官が 1 人、複数の師団長、国防大臣、大統領の従兄弟でケミカル・アリとして知られるアリ・ハッサン・アルマジード (Ali Hassan al-Majeed) が含まれていた<sup>2</sup>。これらの内容の多くは、イラク政府内において高い秘密区分に指定され、外部からアクセスされることを前提としていないものばかりであった。

これらの史料の特性は、イラク側の史料が敵側の状況を伝える貴重な史料ではあるが、戦闘の中でどれだけ破棄されたかが不明であること、多国籍軍が確保した史料の多くは政権中枢における国家レベルの情報に限定され、地方組織に関するものは十分でないこと、湾岸戦争に関する史料は、そもそも独裁政権につきものの密告・処刑といった危険から身を守るための欺瞞や嘘が含まれることや、いわゆる歴史の後知恵の影響を受けていることである。従って、これらの特性を踏まえたうえでの史料の分析が重要となるが、本プロジェクトではこの特性を十分に踏まえてなされたとされている<sup>3</sup>。

分析の内容は、イラクの指導層が軍をどのように管理していたのか、敵（多国籍軍）に対する評価はどのようなものであったのか、そして戦争準備をどのように進めていたのかについてであるとされ、イラク進攻の 2 年後にブッシュ大統領に報告されたが、その全容は公開されておらず、その後一部が IDA などから公開文書として発表されているだけである<sup>4</sup>。今後の公開が期待される場所である。

## 2 イラク軍とアメリカ軍の考え方の相違 — カフジの戦いを例に —

カフジの戦いは、多国籍軍によるイラクに対する空爆が開始され、アメリカ中央軍の関心が当面の航空作戦と、じ後の陸上攻勢作戦の準備に忙殺されていたときに、全く予想していなかった正面からの突然のイラク軍による攻撃により始まった。この作戦は、アメリカ軍の常識では考えられない作戦であり、イラクの視点プロジェクトの中で明らかにされたイラク側のこの戦いに対する評価は、アメリカ軍のものとは全く異なり、湾岸戦争における両者の認識の違いが端的に表れている。そこで、以下、作戦に対する両者の評価の違いを比較し、両者の考え方がいかに異なるかを見てみたい。

カフジの戦いにおけるイラク軍の作戦目的は、多国籍軍を可能な限り迅速に地上戦に引きずり込むことであった。計画の細部は、多国籍軍の航空作戦が開始されて 10 日後の 1991 年 1 月 27 日ごろに完成した。攻撃場所として選定されたのはクウェート・サウジアラビア国境沿いに、海岸部のアラブ諸国で構成された東部合

<sup>1</sup> Kevin M. Wood, *Iraqi Perspective Project Phase II, Um Al-Ma'arik (The Mother of All Battles): Operation and Strategic Insights from an Iraqi Perspective, Volume 1 (revised May 2008)* (Alexandria: IDA, 2008), p. xiii.

<sup>2</sup> Michael R. Gordon, Bernard E. Trainor, *Cobra II: The Inside Story of the Invasion and Occupation of Iraq* (New York: Pantheon, 2006), p. 56.

<sup>3</sup> Wood, *Iraqi Perspective Project Phase II*, p. xvi.

<sup>4</sup> Gordon and Trainor, *Cobra II*, p. 57.

同軍の防御地区（カフジを含む）からアメリカ海兵隊の防御地区を含む地域で、東部合同軍地区には主攻撃部隊としてイラク第 3 軍団を、アメリカ海兵隊の防御地区に対しては助攻撃部隊としてイラク第 4 軍団を指向した。助攻撃であるイラク第 4 軍団は、1 個装甲師団と 1 個機械化師団を参加させ、機械化師団をもって陽動攻撃のためサウジアラビア領内に縦深に約 20km 侵入したのち東へ約 25km 旋回してクウェート領内に引き返す一方、装甲師団は有志連合軍の航空攻撃を引き付けるため国境近傍のアル・ルキ（al-Ruq'ī）に対する攻撃を行うこととされた。主攻撃であるイラク第 3 軍団においては、1 個装甲師団と 1 個機械化師団が攻撃を実施し、機械化師団によりカフジを攻撃、確保する一方、装甲師団によりカフジの北西において多国籍軍の航空攻撃を引き付ける陽動攻撃を行うこととされた<sup>5</sup>。

1 月 29 日夜、カフジに対する攻撃は開始され、作戦は概ね計画通りに実行された。

イラク第 4 軍団の機械化師団による攻撃は、散発的な航空攻撃と軽微な抵抗を受けただけで、大きな損害を受けることもなく、30 日の夜明け前には計画通りクウェート地区内に帰還した<sup>6</sup>。

イラク第 3 軍団の攻撃は、その西翼で第 3 装甲師団隷下の第 6 旅団が陽動任務のため 25km ほど南下したが、多国籍軍の空爆のため大損害を受け、日が変わる前に後退した。旅団は精神的にも崩壊し、指揮官は更迭され、「残っていたのは名前だけであった」とイラク側は記録している<sup>7</sup>。カフジに対する直接の攻撃に任じた第 5 機械化師団は、国境沿いに配置されたサウジ国家警備隊とサウジ海兵隊を駆逐し、30 日の夜明け前にはカフジを占領した。

これに対して多国籍軍側では、アラブ諸国の部隊から編成されカフジ地区を担当する東部合同軍が、アメリカ軍の航空部隊と砲兵の支援の下、サウジ国家警備隊第 2 旅団とサウジ陸軍第 8 機械化旅団及びカタール機甲大隊により、30 日夜から 2 月 1 日にかけて 3 回の攻撃を実施した結果、イラク第 5 機械化師団は 1 月 31 日夜にはカフジから撤退し、カフジの戦いは多国籍軍の勝利に終わった。少なくとも、一般的な我々の視点からはそのように見える。

このようなカフジの戦いをアメリカ、イラク両軍はどのように評価していたのだろうか。

当時アメリカ中央軍司令官であったシュワルツコフ大將は、「一個師団だけでサウジを襲うなどというのは全く軍事的理論が成り立たない……結局は、フセインが多国籍軍の空爆にもかかわらず、イラクは屈したりしていないことを世界に誇示するための宣伝作戦だという解釈に落ち着いたが、……これまた大失敗の上塗り……」<sup>8</sup>であり、イラク軍の弱さを改めて明らかにするとともに撃退に成功したアラブ連合軍が自信を持つことにはなったが、戦闘の影響度は「象の上にとまった蚊」<sup>9</sup>のようなものであったと評している。

また、アメリカ国防総省の公刊史では、「サダム・フセインの実施した唯一の攻勢作戦が阻止されたことは、有志連合軍にとって重要な意義があった。……イラク軍が移動すれば必ず空から打撃され、動かなければいずれば、空からの攻撃か地上部隊により打撃されることを意味したからである。」と、アメリカ軍の圧倒的な空地の火力により大きな損害を与えたことを評価している<sup>10</sup>。

一方、イラク軍側では全く逆の評価をしている。作戦開始から 5 時間ほどの当初の段階は、「イラク軍にとって世界に誇るべきイラク軍の精強さを示すものであった」と、作戦の初動を高く評価するとともに、戦略上、作戦上そして士気の面からも「大勝利」であったとしている。イラク軍にとってこの作戦は、多国籍軍が準備

<sup>5</sup> Wood, *Iraqi Perspective Project Phase II*, p. 27-33.

<sup>6</sup> *Ibid.*, p. 34.

<sup>7</sup> *Ibid.*, p. 37.

<sup>8</sup> H・ノーマン・シュワーツコフ、『シュワーツコフ回想録——少年時代・ヴェトナム最前線・湾岸戦争』沼澤洽治訳（新潮社、1994年）p. 443.

<sup>9</sup> Wood, *Iraqi Perspective Project Phase II*, p. 45.

<sup>10</sup> *Ibid.*

していた計画を混乱させ戦争の流れを根本的に変えたものであり、計画策定からその実行に至るまで、イラク軍による作戦の成功例として研究に値するものとされた。実際、カフジの戦いは 1991 年以降、イラク陸軍大学における重要な教育課目とされた。また、当時のイラク政権の公刊史においては、サダム・フセインが「現代の偉大な軍事戦略家」であることを証明した戦いであったとし、その理由を、「この戦いにより、イラク軍は精強であることが証明された。敵の偵察衛星、偵察機、そして技術的な優越にもかかわらず、周到に準備された計画に基づき夜間攻撃を成功させることができたからである。また、このことはイラク軍兵士が、将来世界の軍事史上に記録されることが確実と言える、カフジの戦いのような激戦を遂行し得ることを証明したのである。」としている<sup>11</sup>。このような認識は、イラク軍の指導層だけが持っていたわけではなく、イラク軍全体で共有されていたようである。例えば、助攻撃の第 4 軍団では、陽動攻撃を終了した部隊が帰還したとき、部隊の士気が大きく高揚したとしている。当時のことを第 4 軍団長は、「……この任務の後、部下指揮官たちの士気は高揚し、どのような結果になろうとも戦い抜く意志に溢れていた。」と証言している。また、共和国防衛隊では第 5 機械化師団の成果を羨望し、同師団の帰還直後、敵の縦深地域に対する同様の任務を自分たちが行うことを切望し、第 5 機械化師団の行った作戦の詳細を知りたがったとも言われている<sup>12</sup>。

また、アメリカ軍がイラク軍に対して大きな損害を与えたとしていることについてサダム・フセインは、イラク軍の人的損害がアメリカ軍の損害の 4 倍を超えなければ大勝利であるとみなしていた。そのため、多国籍軍側がカフジの戦いにおいて壊滅的な打撃を与えたとされるイラク第 5 機械化師団について、イラク軍はそれほど大きな損害を受けていないとし、逆に「……31 日に第 5 機械化師団は空襲を 360 回受けた。一方エジプトは 1967 年に、イスラエル空軍の 150 機の飛行機に敗れている。つまり、150 機の攻撃で国が敗北する場面があるのに対して、イラク軍では、1 個師団が 360 回もの空襲に耐えたのである。」と、多国籍軍による圧倒的な航空攻撃に耐え抜いたことを誇っているのである<sup>13</sup>。

多国籍軍の圧倒的な航空戦力に対するこのような認識は、湾岸戦争全般を通じてのイラク軍における共通的な認識で、サダム・フセインは多国籍軍の圧倒的な制空権下におけるイラク軍の行動を英雄的と評価していた。サダム・フセインの航空戦力を測る価値基準は、一般的なソーティー数、投下された爆弾の量、破壊した目標数、撃墜した航空機の数と言ったものとは異なり、「負けないことが勝つことである」との考えに立っていたことから、サダム・フセインは「……これまでの歴史で、1 ヶ月半にも及ぶ準備爆撃があっただろうか。……この航空攻撃の威力は計り知れないほどだ……それゆえ我々は、精神力と頑強さにおいて、イラクは世界に冠たる存在なのだ。……」と発言している。また、イラク国防省では、「湾岸戦争におけるアメリカ軍の攻撃への対応に関するイラク空軍および防空司令部の役割の検討」において、イラク空軍は全戦闘機の 75%、全航空兵器の 92% を隠蔽、分散により破壊を免れるとともに、高価な誘導兵器の 98% 以上が、電子戦装備は 76% が温存され、人的損害は 0.096% と僅少であり、「……我が空軍の損害は、使用可能だったものや、敵の航空攻撃の規模、特性、期間を考慮すると、比較的少なかった……」と、残存した装備の数によりイラク空軍の成果を評価していた<sup>14</sup>。

カフジへの攻撃に先立ちサダム・フセインは、「……我々の前に立ち塞がる敵はイラン軍ほどの堅確な意志を持っていない。我々が鉄の信念を持って臨めば、敵を打ち破ることができる……この戦いの規模は小さいかもしれないが、政治的な影響は決して小さなものではない。結果として何千人ものイラク人民の命が救われる

<sup>11</sup> *Ibid.*, p. 26.

<sup>12</sup> *Ibid.*, p. 44.

<sup>13</sup> *Ibid.*, p. 43.

<sup>14</sup> *Ibid.*, p. 351-352. 1976 年の第 3 次中東戦争時は、湾岸戦争でイラク軍が直面した戦力とは比較にならないほど少ないイスラエル空軍に対して、エジプト軍は作戦機のおよそ 70% を失ったとし、イラク軍がいかに優れているかを評価している。

のである。……従って、その期待される成果ゆえにこの戦いには真剣に向き合わなければならない。……この作戦が成功すればこの戦争は短期間で終わるだろう……」と訓示したが、イラク側から見た湾岸戦争はその予言通り、共和国防衛隊がアメリカ軍主導の多国籍軍をユーフラテス川で阻止することによりバグダッドを防衛し<sup>15</sup>、地上戦開始からわずか 100 時間という短期間で戦争を終わらせたのである。

### 3 相手の視点を理解することの意義

一般に戦争における勝敗は、相手が状況をどのように認識するかによって決するといわれている。そのため、効果的に戦争目的を達成するためには、物理的な破壊を伴う戦闘行為だけでなく、外交、経済封鎖、情報戦、心理戦など多様な手段を行使して、相手の認識に影響を与える必要があるが、相手の視点を考慮せず、主観的な価値判断に基づく努力だけでは、相手が負けを容易に認識することはなく、戦争は泥沼化するであろう。そう考えたとき、湾岸戦争におけるイラク軍の認識が多国籍軍と大きく異なっていたことは意義深いものがあるといえるのではないだろうか。湾岸戦争においてはシュワルツコフ大将がいつているように戦争の成り行きには大きな影響を及ぼさなかったとしても、このような認識の違いが、相対する勢力同士の戦いにおいて効果的な戦略や作戦の遂行を妨げ、無用な出血を双方に強いる可能性があることは否定できないからである。まして抑止を重視する戦略においては、このような認識の違いを超えて、相互に正しいメッセージを交換・認識できなければ、双方が意図しないエスカレーションを招くことになるであろう。そのようなことを防ぐためには、それぞれの国にとって安全保障上の大きな考慮を要する国々については、歴史、文化、政治、各種制度など、その認識に影響を及ぼすと考えられる事項を総合的かつ継続的に研究するとともに、自己の意図を適切に発信する手段や方法論の確立が求められるところである。

### 4 おわりに

今年が湾岸戦争 30 周年の年である。この節目の年を捉えて、防衛研究所ではこの春に「湾岸戦争史」([http://www.nids.mod.go.jp/publication/falkland/gulf\\_war.html](http://www.nids.mod.go.jp/publication/falkland/gulf_war.html))を発刊した。また、9 月には「歴史としての湾岸戦争」と題した戦争史研究国際フォーラム (<http://www.nids.mod.go.jp/event/forum.html>)を予定している。この節目の年を機に、湾岸戦争を改めて見直してみようという方は、われわれがまとめた出版物を一読いただくとともに、是非フォーラムの聴講をお願いしたい。そして、その際に本稿が、皆様に新たな視点を提供できれば幸いである。

#### プロフィール

profile

戦史研究センター

戦史研究室

主任研究官 1等陸佐 阿部 昌平

本欄における見解は、防衛研究所を代表するものではありません。  
NIDS コメンタリーに関する御意見、御質問等は下記へお寄せ下さい。  
ただし記事の無断転載・複製はお断りします。

防衛研究所企画部企画調整課

直 通 : 03-3260-3011

代 表 : 03-3268-3111 (内線 29171)

F A X : 03-3260-3034

※ 防衛研究所ウェブサイト : <http://www.nids.mod.go.jp/>

<sup>15</sup> *Ibid.*, p. 56-59. この認識がそのまま 2003 年の OIF におけるイラク軍の防衛戦略に大きな影響を与えた。